

平成24年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻10月号(通巻639号)

風土



10

雲の峰
神蔵器

法隆寺翔つや七星てんと虫

老いてこそ見ゆるものあり赤のまま

八月の田の真ん中にけいじの忌

浜木綿に月よりの使者いまとどく

炎天へ髪ととのへて討つて出づ

盆過ぎて闇新しく月育つ

蓑虫や糸一本に日を集め

端溪の海を充たせり雲の峰

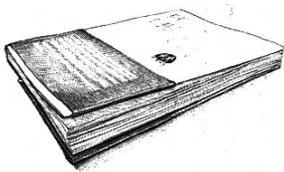
曼珠沙華離れて白き曼珠沙華

名月や日本のへその杉並区

大宮八幡宮

ぶだう食ぶ一人の刻の仏かな

満月や竹灯籠の林立す



竹間集

同人作品



竹田城址

田中佐知子

梅雨晴間樹々それぞれの香を放ち
茜流伝ふ紀州の鮎投網
登山道ここより舗装途切れぬて
千体仏一体ごとに緑さす
青芝や閉ざせる鉱山の診療所
天空の城夏雲に真向へり
北千畳南千畳青嵐

晩夏

工藤ミネ子

奥羽嶺のくろがねの意地干薇
空梅雨や雀の威嚇負けてぬず
貌みがく小石の日陰大黒蟻
二番子にことばのいづみ晴れ渡る
青嵐やガラスケースに遮光土器
階にゆるる鎌首まむし草
漣抜ける水に声ある晩夏かな

水中花

柴田久子

夕立ののちのわが街見下ろせり
百日紅水銀灯の点りけり
校長が水足してをり水中花
思ひ出に匂ひありけり百合の花
光圀の庭に飼はれて蝸牛
路地裏を掃いて涼しき風通す
大花火果てて滴る峡の星

茅の輪

中村洋子

万緑へ入らんと息ととのへる
夏の月河口へ水の押されゆく
さしかかる鳥羽街道の凌霄花
清滝の一番星や蛭狩
大寺の涼しき音の文庫鍵
炎天の影を小さく歩きけり
その中に星の入りぬ茅の輪かな

さるすべり

橋添やよひ

御文庫に「明月記」入れさるすべり
冷泉家八百年や青水無月
堂涼し若冲「月夜の芭蕉図」絵
定家若冲墓所をひとつに雲の峰
蛭の闇曳くながさありにけり
俱会一所墓碑銘にあり合歡の花
大賀蓮一如存間の寺に咲く

白光

南うみを

ブルーベリー摘めり日傘の浮き沈み
腹ばひの涼しさわれに羊らに
穴の土うつすらと付け空蟬は
墓山の闇を剥がしておはぐる来
陰干しの下着のしづく十葉に
歯ぎしりのごとき詩が欲し蟬時雨
炎天へ原発ドーム白光す

双葉

島谷征良

朝顔の双葉の厚き緑かな
多佳子忌や朝の燕のひるがへる
この家にあの家に枇杷町の雨
紫陽花の毬の揺るれど何も出ず
散り敷ける紅はあはれや花石榴
蝮酒あふりて夜を寝ねられず
このごろの色とりどりの蠅叩

夏逝く

塩田博久

手探りのFM選局明易し
紫陽花や厚着薄着を繰り返し
梅雨ながし濡れ手を厭ふ傘袋
ひとの句のみな佳く見ゆる溽暑かな
病葉や貸して帰らぬ初版本
片陰をしかと見定め小買ひ物
西瓜来て冷蔵庫大混乱す
オリンピック結果だけ観て涼しかり
夏逝くやひと月ごとの塊りに
古机薔薇一輪の挿されあり

山河集

同人作品



神蔵器選

梅雨明けの雲を抜けたる吉井川 生田 作

濡縁に木の影届く夏休み
遮断機の撥ねて一人の青田原
雲被る那岐連峰の土用風
無住寺の青葉雫に打たれけり

季寄せよりこゑ立ち上る夜の秋 林 いづみ

Tシャツの住職厚き膝揃へ
墓に句碑に涼風とどめなかりけり
梅を干す匂ひもろとも裏返し
襟足に髪のはりつく大暑かな

朝顔の日本のいろにひらきたる 森田 節子

夏蝶に付きて入りたり自動ドア
駅頭に托鉢僧立つ大暑かな

羅の帯の群青ひくく締め
花木槿非番のナースの会釈かな

アスファルトに佇ち冷房の身を戻す 生田恵美子

黄のカンナ咲かせて街の画材店
白猫の朝の貴婦人百日紅
一つ葉や無名に生きて石一つ
冷房やしづかに使ふ銀の箸

涼しさの指先釈迦の説法印 間島あきら

葺き替への茅の切り口夏立てり
夏鶯 日月立てる 枢 跡
三段の滝の二段の捨身かな
水底を歩むひかりや若楓

◇特別作品◇(抄)

骨寺村

森屋 慶基

雪形は本寺きつね須川岳
栗駒の溪たばしるや夏の川
国道の村突き抜くる雲の峯
青田風莊園と言ふ盆地かな
須川岳風ともちりがてに山法師
曲るたび木天蓼の花同じ景
黒鶉居久根に抱かる在家かな
どの郷も捨て田を抱ふ墓
古絵図のままに小さき田水守る
十枚がほどに一反青田かな

風土独語／神蔵 器



梅雨明けの雲を抜けたる吉井川

生田 作

吉井川は、岡山県の東部を南流する川で、岡山・鳥取県境の三國山付近に発し、岡山市で児島湾に注ぐ。古くから津山盆地と岡山平野を結ぶ水路に利用されている。

作者の現住所は津山市北園、生家はほど近い勝田郡勝北町、旧名は美作で、有数な穀倉地帯である。ところがこの地方は“やまじ”という日本三大魔風の吹き荒れる地として知られている。

九月から十月頃にかけて、台風、または発達した低気圧による南よりの風が中国山地にぶつかり、四十メートル、五十メートルの突風となつて襲いかかり吹きぬける。収穫を目前にして豊作と見られていた稲作が、一夜にして全滅の被害を受けることも少なくはなかった。

梅雨明けは、だいたい七月十日前後、今年の最初の難関も無事に通過したところ、一つ大きな雷鳴がとどろいて、いなづまが走つた。吉井川は、その中国山地の上の黒い雲の中をかいくぐり、抜け出るように、すでに青空の広がった平野、美作の美しい青田の中を勢よく流れている。

作者は過日久し振りの手紙に「作州の片隅で、なんとかやっております」とあった。彼は謙遜して旧名を使っているのではな

らう。彼は作州を愛し、作州に誇りを持ち、ふるさとの自然に感謝し、祈りを持っている。

夏蝶に付きて入りたり自動ドア

森田 節子

寓意と童心の飛躍に思わずほほえみがこぼれる。

箱根あたりの森の美術館であろうか。万が一にもそんな偶然がある筈など言つて、ことの真偽など問う前に、ありありと実景が見えて来る。

自動ドアの奥には何があるのか、読者には解らない。世界的な名画か、ガレの素的な工芸品か。はやる気持をおさえて作者は自動ドアの前に立つ。ここで作者ははじめて夏蝶を登場させるのである。読者としてはちよつと気持をはぐらかされた気持もするが、文章でいえば、ここはためどころで、このためによつて、ドアの奥にあるものへの期待感極度の緊張感に高まる。

なお、この句の成功は“自動ドア”であつて、もし手動のドアであつたら全く興味がなくなるであろう。一読、平凡なようで、凡手の及ぶところではない。(以下略)

風土集



神蔵器選

遠花火母のてのひら熱きまま 福生 雨宮 桂子

「おかあさん」百遍呼びぬ大暑かな
ひまはりに肩を抱かれてあたりけり
ちちははのなくておほむらさきの翔つ

水無月の富士は薄目をしてあたり
神田川越えて夏越の祓かな 東京 遊橋 惠美

噴き上げて水の鎖に水生れし
夏雲を捉ふクレーンの先にかな
藍浴衣母とたがひし道を行く
その先に港の見えしデイゴ咲く
雲の峰丸の内より 兜町 上尾 根岸 善行

あめんぼの足も水面も濡れてゐず
あめんぼが踏んばる水の鋼かな
夏の月上りて風の届きけり
昼寝覚め老眼鏡の置いてある

賜りし命 四万六千日 川崎 井上 あい

日を返すソーラーハウス雲の峰
山菜の灰汁ぬく厨半夏かな
富士の影叩きし湖面大夕立

谷川の水のひびきや合歓の花
青草の波となりゆく富士に佇つ 三鷹 布施まき子

うす紅を秘めて開かむ蓮の花
朱雀門はた唐門や百日紅
夏薊ほとけの道に雨の来て
半夏生回向柱に五色揺れ
早起きす蓮音聞かんと思ひゐて 五條 上辻 蒼人

耳門とて青葉の風がよく通り
木々揺すり光も弾き青嵐
形代や手を切るやうな水に置き
横並ぶ大暑の山の眉の濃し